

法然・親鸞の夢想

— 祖師伝絵が描く聖体示現

《キーワード》 祖師伝絵・法然上人絵伝・善信聖人親鸞伝絵

仙海義之

一

先に、拙稿「鎌倉絵巻に描かれた祖師と僧俗 — 法然・親鸞・一遍の絵伝から —」（『史潮』新六一号、歴史学会、二〇〇七・五）によって、祖師伝絵に於ける絵画表現の特質を、聖と俗との二面から概観した。この内、祖師に聖性を付与する手法の一つとして、「奇瑞の描出」という表現に着目した。

前稿では、法然が善導と対面し、親鸞が救世観音より夢告を受け、一遍が熊野権現より神託を受ける等、各祖師の信仰の起点とも言うべき重要な出来事が、何れも夢想を媒介として表されている事を指摘し、こうした奇瑞を描き出す事によって、祖師が非凡な能力を持つ者である事を表したと解した。本稿では、祖師伝絵の中で、夢想の描出という表現が担った役割について、更に考を深めてみたい。

考察の対象としては、「法然上人伝絵」（知恩院、四十八巻本¹）以下「法然伝絵」と簡称）と「善信聖人親鸞伝絵」（専修寺、高田本²）以下「親鸞伝絵」と簡称）とを取り上げる。

二

まず、「法然伝絵」の中から、夢想を扱った場面を取り上げる。「法然伝絵」巻七段五（挿図1）は、法然が夢の中で善導に遇ったというエピソードを表す³。「二祖対面」「善導来現」などと簡称される逸話である。半身金色の姿で現れた善導が、法然が専修念仏を布教する様を称賛した。善導からの夢告によって、法然の信仰の正当性が裏づけられるものとなった。

画図は、第十八と第二十紙の三紙を接いで、横幅一三〇センチ強の画面を作る（第十八紙は、幅三一・八センチと、やや短小）。画面の中央に、小渦を合わせながら波立つ、強い流れの河を表す。詞書に「はるかに西方を見たまへは」との文言があり、また画図でも法然の姿を左方に向けて描いている事から、凡そ画面右方が東、左方が西と意識されているものと知られる。ところが、詞書に「碧水北より出て波浪南になる」と有るにもかかわらず、その流れを画面の右上から左下へと斜めに描いている。これは、絵巻物特有の縦

